

# オーストラリア、戦争と日本

——そして忘却されたアジア——

ビートライス・トレフオルト

(訳 村上享二、監訳 加治宏基)



戦後のオーストラリアでは、第二次世界大戦（以下、第二次大戦）の記憶は、国内のアイデンティティと経験をめぐる多様な物語に内在化されて形成されてきた。独立を勝ち取り、植民地化や先住民からの剥奪という歴史を克服し、そして多文化アイデンティティを包摂する国家として、オーストラリアは特に過去三〇年の間、第一次世界大戦（以下、第一次大戦）においてトルコやヨーロッパで従軍した志願兵を称賛することで「陳腐」なナショナリズムを高揚させてきた。第一次大戦が特筆され、男らしさと白人であること（アングロ・ケルト）に焦点が絞られたことで、一九四一年から一九四五年の日本との戦争は戦争の記憶の中で脇に押しやられた。さらに、第二次大戦が地球規模だったことや、オーストラリア人がアジア太平洋のみな

らずヨーロッパや北アフリカでも枢軸国と戦ったという事実があるにもかかわらず、オーストラリアでの第二次大戦の記憶は日本による捕虜体験が大半を占めており、戦勝五〇周年を経ても憤りや恨みへの言及がなお止むことはなかった。

本稿は、過去七〇年間、オーストラリアで日本との戦争がどのように記憶されてきたのか、幅広く考察するものである。ポップカルチャーやツーリズムを通じて初めて日本に触れる若い世代が増えてきた一方で、年配者が初めて目にし、また最も多く向き合ってきた日本とは、キャンベラのオーストラリア戦争記念館や全国にあるその他多くの慰霊碑、記念碑、国民祝典、映画もしくは文学作品で描かれる第二次大戦といったレンズ越しのそれであった。（日本

と同様にオーストラリアの人口ピラミッドの最多層を占める)高年齢者はおしなべて日本と戦争を関連付ける人口層であり、「クールジャパン」に興味をもつ世代よりも相当多い。

そして、絵葉書の裏に描かれたブルームにある日本人墓地は、日本との「戦争」を誤って連想させるものとして特筆すべきであろう。オーストラリア北西部の小さな町ブルームは、日本によるジャワ侵攻が佳境を迎えた一九四二年三月三日に空襲を受けたことで有名であるとともに、一九世紀末に日本人の真珠養殖業者が多く移住しており、彼らの集団墓地はこの町の観光スポットにもなっている。絵葉書の墓石には、一八七二年にハマ・キヘイ(Hama Khei)という若者が病死したと刻まれているにもかかわらず、絵葉書のキャプションは「戦没者共同墓地」とある。このように一九世紀後半の真珠漁師と一九四二年の空襲が誤って関連付けられているのだ。

日本との「戦争」をめぐる国民の物語には二つの重大な要素がある。一つは、戦争を通じてオーストラリアの「成人」である。すなわち、基本的にそれは太平洋をめぐる国際関係であり、英国でなく米国との同盟関係という新たなレベルの外交的自立を求めるものだった。もう一つは、捕虜(POW)収容所での日本人将校や監視員による許し難い残虐行為である。ここでは二万二千人以上のオーストラ

リア人が抑留され、三分の一以上にあたる八千人以上が監禁状態のなかで死の淵に追いやられた。ここで私が示した二つの要素によって、戦争の記憶はオーストラリアと日本の明瞭な関係性を反映するものとなっている。

オーストラリアの近隣諸国では、地理的に近いにもかかわらず、またオーストラリアの多くを占める多文化人種が日本による被侵略地域と直接的、間接的に血縁関係があるにもかかわらず、その戦争の影響がほとんど検討されずにきた。ひとつのエピソードを例示すれば、以前の同僚(オーストラリア生まれ、アングロ・ケルト系)が、オーストラリア人の捕虜について議論した際に、泰緬鉄道建設にかかり連合国側の捕虜とともに働き亡くなった、さらに多くのタイ人、ビルマ人、インド人、マレー人についてはなぜ言及されないのかと問題提起した。そして、これら犠牲者がオーストラリアの戦争物語に入っていないからだという考えを示した。同様に私の日本史の講義でも、オーストラリアの学生は、アジア太平洋戦争が広範囲で展開されたにもかかわらず、大量の日本軍部隊と軍関係者が東南アジアや太平洋地域よりも中国に派遣されていたことを知った時、驚きを禁じ得なかった。それは、彼らの戦争理解が——今のところ彼らが抱いている——シンガポールや東南アジアでの捕虜の物語に支配されているからである。対照的に、私の担当する留学生はオーストラリア人学生の認識

に驚いている。

さらに、少数ではあるがオーストラリアの人々の中でも積極的に発言する人々の間で行われている現在進行中の議論がある。それは、一九四一年から一九四二年までの日本の東南アジア侵略の本質に関して、日本の戦略にオーストラリアへの侵略が含まれていたのかどうかというものである。つまり一九四二年のサンゴ海海戦は「オーストラリアの戦い<sup>1)</sup>」として記憶されるべきかといった議論であるが、私の一部学生もこうした議論に熱中しており、もし彼らがダーウィン港、ブルーム、そしてオーストラリアの北西海岸にあるエクスマース等が一九四二年と一九四三年に爆撃されたことを忘れていなければ、オーストラリアにも「侵略が間近に迫っていた」と想像するだろう。

歴史家でない人々にとつてさえも、今日では共通の記憶は定着している。それは共同体や集団がしばしば無意識もしくは無批判的に「真に起きたこと」だと受け入れた過去に関する共通理解を基盤として、構築し折衝し維持してきたアイデンティティを中心に据えたものである。事実が想像されるのと同様に、流動的で利己的な記憶の性質によって、「記憶」という言葉はその概念を構成する上で効果的に用いられている。集団はそれぞれ他集団より優位に立つために争い合い、優位性を確立するため自らの解釈による過去に依拠している。よつて、共同体や集団レベルでの過

去に関する共通理解が、高度に政治化することもしばしばあり、流動的な一般大衆の記憶はとかく批判に晒されやすい。

オーストラリアで続く白人による政治的支配、それは英国の影響を受けた文化にもかかわらず「オーストラリア人の戦争経験」が支配的な物語に對して、これまで何度となく異議が唱えられてきた。いわゆる「アンザック伝説」は四月二五日に第一次大戦について国全体で記念するものであり、この日は国の祝日である一月二六日のオーストラリア・デーよりも重要な日だと言えよう。一九一五年四月二五日、オーストラリアとニュージーランドの合同軍隊（ANZAC）は、コンスタンチノープル征服を目指しオスマン帝国のガリポリ半島に上陸した。この戦いは長期戦となり、数千人ものオーストラリア人が犠牲となった軍事行動であったが、後に同軍隊によるソナムでの戦いの犠牲者も同日に追悼されることになった。アンザック伝説は、連邦結成から数年後の戦争における純朴で善良な、そして英雄的な粗暴者「へんびな開拓地から来た男たち」といったオーストラリアの国民精神の創造を物語る。この物語にとつて「男たち」の喪失が決定的な効果をもたらしたのは、オーストラリアの人口がまだ少なかった時期にあつて一世代を壊滅させ、全人口にとつて多大なる影響を及ぼしたということである。

しかし一九九〇年代の半ば以降、学術界ではこのような伝説に対して批判的評価が下されており、第一次大戦で戦った志願兵は、歌や詩で称賛されるような「へんぴな開拓地から来た男たち」ではなく、主としてオーストラリアの都市部から英国へ赴いたばかりの移住者であったとの指摘もある。またアンザックについては英雄的に語られる一方で、反抗者、無能な兵隊、また最も端的には暴力集団と表現される場合もある。彼らの海外での功績を美化する国民的衝動を減衰させるこうした言動は非難されるものとなり、数多くあるオーストラリアの「歴史論争」の一つである。<sup>(3)</sup> 第一次大戦におけるオーストラリア軍に関する真実をめぐる学術論争にもかかわらず、アンザック伝説は根強いもので、大人への通過儀礼としてヨーロッパ旅行の途中でガリポリに多くのオーストラリア人が滞在するため、トルコ半島へ新たな侵入者（旅行者）を生み出している。

オーストラリア人の国民生活において特筆されるアンザック伝説とアンザック・デーは、様々な形で第二次大戦の祝典にも影響を与えている。アンザック伝説は軍の武勇を称え、「帝国」との関係からヨーロッパでの戦闘にばかり目を向けて、非白人、非アングロサクソン・オーストラリア人に関する言及は排除されている。<sup>(4)</sup> また重要なのは、アンザック伝説は非戦闘員についても何ら言及がないことである。総力戦である第二次大戦では、兵士と同様に市民

も損害を被ったことは明らかだが、画一的なオーストラリア人の戦争記憶では男たちにのみ焦点が絞られてきた。しかし、学術研究においてオーストラリアの銃後における戦争の影響についても、次第に着目されつつある。<sup>(5)</sup> 一般社会でも、女性の戦時職務は一定程度の評価を受け始めており、一九九九年に従軍看護婦の記念碑がキャンベラのオーストラリア戦争記念館へと続く街路に沿って設置され、ポーア戦争に初めて派遣されたオーストラリアの看護婦の偉大な軌跡が刻まれた。同様に、オーストラリア先住民の戦時職務もこれまで顧みられることがなかったが、二〇一二年にキャンベラの研究者グループが、ポーア戦争以来の各戦争におけるオーストラリア先住民の経験と職務を記録に残すため、競争的資金を獲得した。<sup>(6)</sup> 「白人、アングロサクソン、男性」追悼に対するこのような異議申し立てにもかかわらず、アンザック伝説は戦争を追悼するうえで支配的位置付けを維持し続け、そしてまた日本との戦争の記憶をも作り上げてきた。

オーストラリア人の第二次大戦に関する記憶は、大英帝国との関係と同様に北方諸国との複雑な関係の中に内在化されている。マリアンナ・ディバー (Marianne Dever) が『オーストラリアとアジア——文化取引』の序文に書いたように、今でもオーストラリアでは事あるごとにすぐ北にある「東南アジア」と遠い北方の「極東」とは何ものであ

るかが論点となる。これは、「長い間討論されてきた大西洋の真ん中のどこかに社会文化を位置付けること、ヨーロッパに対する東の視点、米国沿岸に向けた西の視線」と彼女が述べていることと関連している。さらに、デイバーはこのように続ける。一九世紀から二〇世紀初頭にかけて繰り返り広げられた「黄禍」の侵略に対する恐怖は、見かけ上は攻撃されやすい帝国の居留地であって、より切迫したものと受けとめられた。そしてこれは一九七〇年代半ばまで展開された有名な移民政策のように、とりわけ白人であるということにおいてオーストラリアを保守的にさせた。<sup>(7)</sup>

たとえ歴史専門家や学術界が先住民や非白人、および女性の参戦について強調したとしても、大衆の戦争記憶におけるオーストラリア兵の中心像は、あくまで白人男性である。<sup>(8)</sup>ただしオーストラリアがかつて統治したニューギニアでは、この例外が見てとれる。オーストラリア人の戦争記憶の片隅には、最も危険な状況下で負傷したオーストラリア兵を救助するために担架の搬送役が献身的役割を果たしたことで、「ファジー・ウジー・エンジェル」(Fuzzy wuzzy angels)というあわめてロマンティックにイメージされるニューギニアが存在する。「ファジー・ウジー・エンジェル」という言葉は、オーストラリア人サッパー・バート・ベロス (Sapper Bert Beross) が彼らの勇気に捧げた一九四四年の詩に由来し、またオーストラリア兵たちが

メラネシア人の髪型を表現する際に用いられてもいる。

無私のニューギニア人の担架搬送役をめぐるイメージは、オーストラリア人の記憶の中に特筆すべきものとして存在しており、直近では二〇〇八年に「戦火のもとで称賛に値する偉業を果たしたニューギニア人の勇氣ある犠牲的行爲の公認」という発議がオーストラリア議会でなされている。<sup>(9)</sup>しかし「友好的な」隣人に関する言説は、(オーストラリア人にとって)あまり心地よい話ではなく軽視されがちである。また、多くのニューギニア人は日本軍側につくか、もしくはオーストラリア人と日本人の双方にまつたくの無関心であった。よって、開戦からの数か月間、オーストラリア人のニューギニア人に対する態度は良くて曖昧なもので、悪ければ猜疑心に満ちていた。またハンク・ネルソン (Hank Nelson) が明らかにしたとおり、日本の侵略当初の数か月間、ニューギニアのオーストラリア人入植者コミュニティで生じた混乱の一部は、「植民地支配者にとって先住民は信頼に値しない」といった至極当然の考え方によるものだった。<sup>(10)</sup>

ファジー・ウジー・エンジェルと信頼を置けない先住民とは、東洋学者にとってコインの裏表であり、ポジティブとネガティブ、擁護と人種差別等、それらいずれもがニューギニア人の戦争経験や日本人(またオーストラリア人)による支配をめぐる複雑さを正確には捉えていない。

「フアジー・ウジー・エンジェル」によって、オーストラリア人の戦争体験における白人像が傷つけられるというより、むしろ際立っている。

少なくとも複数の政治家がそうであるように、オーストラリア人の記憶の中で支配的なアンザック伝説によって、ヨーロッパ、帝国、そして第一次大戦に焦点が絞られ、第二次大戦中にアジアにおける連合国の代理人としてオーストラリアが果たした貢献が過少評価されてしまった。しかしながら、これまでに「伝説」を作り変える試みも看取される。一九九三年にポール・キートン<sup>(1)</sup>が政権がココダ道

(Kokoda track) を新たなガリポリに仕立てようとしたが、そこには戦争の記憶をヨーロッパと切り離して主権国家としてのオーストラリアに収斂させ、また第一次大戦から第二次大戦へと切り替え、最終的にはヨーロッパからアジアへと自己認識を向かわせようとする明確な意図があった。<sup>(2)</sup>

この意識転換によって、一九四二年と一九四三年にオーストラリア人と日本人とが戦い、現在はオーストラリア人が健康志向と記念行事のために一〇〇キロメートルほどウォーキングするココダ道周辺は、空前の旅行ブームで大きな成功を収めた。<sup>(3)</sup>

オーストラリア人の戦争記憶を第二次大戦とアジアを含むものへと拡大しようという試みは、白人に固執している点だけを問題視したのではない。ネビル・メアネイ (Neville

Meaney) は、オーストラリアが二〇世紀最後の四半世紀にアジアを受容しアジアの一部へと回帰することを志向する文化政策の転換——これもポール・キートン<sup>(1)</sup>が、その概念の弱さにより苦境に陥っていると議論してきた。事実、オーストラリア初のアジア出身の国会議員であるベニー・ウォンが二〇〇二年に上院議員に当選したにもかかわらず、オーストラリアを覆う英国式慣習や伝統的支配はまったく批判の対象とされることなく、二一世紀になってわずかに変更されただけである。

アンザック伝説がその活躍を広く知られるような機会が、過去四半世紀にわたってなかった。また多文化主義が根付いているとはいえず、戦争中に敵側についたオーストラリア人は、アンザック・デーの行進に参加することが叶わなかったし、オーストラリア兵とトルコ人が共に行進するのが許容されるには、一九九八年まで待たねばならなかった。よって日本人の行進が認められるのはいつになるのかということなどは、想像し難い。

二〇一四年と翌一五年にゴールドコーストとブリスベンの地方新聞は、アンザック・デーの行進で、他の旗と並んで日本の国旗を掲揚すべきか否かという論争を掲載した。これが一般認識に関する調査としては不十分だとしても、この事例はかつての敵に対する民衆の増悪がどのようなも

のかを示していよう。<sup>(14)</sup>この日本の国旗をめぐる記事は、戦争終結から七〇年が経っているにもかかわらず、第二次大戦においてオーストラリア人捕虜が受けた体験が特筆されてきたことから、国民の複数の階層にある人々の怒りを呼んだ。彼らの多くが、捕虜の扱いと戦争犯罪に関する上記記事に憤慨し、書簡を送りつけている。

戦争中、日本の捕虜収容所での虐待と残忍性に関する報告は、何らかのフィルターを通して銃後へ伝えられた。そして日本が敗北して後にオーストラリア政府は、六年以上を費やして戦争犯罪裁判を開廷し、捕虜に代わって多くの戦犯を収容した。戦争中に個人が関与した犯罪を追及する連合国側の幅広い活動の一環として一四八名が死刑判決を受け、四九六名が有期刑を受けている。<sup>(15)</sup>ローハン・リベット (Rohan Rivett) の『藪の陰』(一九四六年)に記されたようなサイバターの記憶に基づき、戦後数年間は常に報道で日本の犯罪が取り上げられていた。しかし戦争が日常生活から遠ざかるにつれて、彼らが体験をありのままに語らずにただ他の捕虜に同調していることに、多くの人が気付いていった。ミハエル・マッカーマン (Michael McKernan) は、多くの捕虜たちが、囚われの身として戦時を過ごし、兵士としては何かを失格したとの感情を引きずっているといった問題を指摘している。その意味では、第一次大戦の塹壕で戦い死んでいった英雄的な兵士とは異なるのだ。<sup>(16)</sup>

しかし、日本を含む他の地域と同様に、平時における定年に達した退役軍人が、普通の生活に戻った日本人や、戦時中の捕虜体験やその記憶と向き合い、記述するような時代がようやく訪れた。一九八〇年代半ばにも、オーストラリア国営放送 (ABC) のラジオ番組は、捕虜のサイバリーに対するインタビュー番組を放送している。それは、それまで沈黙してきた多くの退役軍人が初めて彼らの体験を公にしたというだけではなく、オーストラリア人捕虜に対する関心が歴史認識に新たな動きをもたらし、第二次大戦におけるオーストラリア人の物語を強力に形容するものとなった。<sup>(17)</sup>オーストラリア人小説家、リチャード・フラナガン (Richard Flanagan) の小説『北の奥地への細い道』は、二〇一四年に有名なブッカー賞を受賞している。泰緬鉄道の労働キャンプや後の広島郊外における父親たちの体験が彼自身に与えた衝撃を描くとき、それは他の多くのオーストラリア人の感情を包み込むものとなった。そしてこの衝撃は、彼がこの小説を書く動機となっている。<sup>(18)</sup>

一九八〇年代以降に再び高まった捕虜体験への関心は、オーストラリア人の独特な戦争記憶を形成した。まずひとつに一九四二年のシンガポール陥落があるが、その結果、日本の収容所に多くのオーストラリア人捕虜が収容されたことで、陥落の原因に対しても改めて関心が集まった。シンガポールは英国により「難攻不落の要塞」と形容されて

いた。急転直下の陥落によって、オーストラリアは突如として亡びゆく帝国の淵へと追いやられた。よって一九四二年のシンガポール陥落は、しばしば「裏切り」とみなされ、また英国軍が敗北した原因ともされており、オーストラリア人の軍事史家の間で熱心に論議され続けている<sup>(19)</sup>。これは東南アジアでの帝国の敗北であるとともに、戦後オーストラリア政府にとっては外交政策における新たなレベルでの自立を受け入れるよう、また衰えゆく帝国である祖国よりも米国とより緊密に連携するように後押しするものとなった。

第二に、捕虜に焦点を絞ることで、戦争の主役は連合国と日本であったとの思考方法がいつそう堅固になる。そして、いずれの帝国主義勢力とも関係ない、またはどちらかの帝国主義勢力が統治する地域にある第三国の収容所に、自国の捕虜が収監されていたという事実が、オーストラリア人の記憶において極小化される。オーストラリア人捕虜の記憶では、当時の「先住民」や「現地人」を危なっかしく、信頼を置けない者と認識している。ボルネオでの死の行進の数少ないサバイバーである二人、ネルソン・ショート (Nelson Short) とキース・ボッテリル (Keith Bottrell) (一九四五年にラナウから逃げ出した) は、ハンク・ネルソン (Hank Nelson) との対話において、「先住民」が反日ゲリラなのか親日ゲリラなのか、それとも彼らは単に生き

ながらえようとしているだけなのか、さらにはオーストラリア人脱走者のために彼ら自身とその家族の幸福を危険にさらすことを望んでいないのかが判然としなため、「先住民」を信用することがいかに難しかったかと回想している<sup>(20)</sup>。

また捕虜に注目することで、泰緬鉄道を第二次大戦でオーストラリア人が被った被害の特筆すべき象徴へと仕立て上げ、オーストラリア人の被害だけを独占的かつ最大限に描き出すことになった。数多くの現地住民が徴用され、ひどい扱いを受けた代わりに、過酷な鉄道敷設作業がいついに終わったという事実と同様に、他の連合国捕虜の存在はほとんど忘れられている。P・ラマサミー (P. Ramasamy) が指摘しているように、八万人以上のインド人労働者が鉄道敷設作業のためにマラヤから連行され、うち家族のもとへ戻った者は四万人に満たなかった<sup>(21)</sup>。

戦争記憶においては戦闘員に、そして連合国と日本との戦争では排他的に焦点が絞られた結果、彼らの故郷である原野と都市が戦場となって破壊されたという実体験には目が向けられずにきた。すでに崩壊しつつある植民地の実態として戦争に関与した人々がいたが、これらの人々は後に、インドネシア人、ベトナム人、カンボジア人、ラオス人、シンガポール人、マレーシア人、パプアニューギニア人、朝鮮人、台湾人、フィリピン人、パラオ人へと統合さ



れた、またはマリアナ諸島でのチャモロ人のように、独立が認められなかった民族である。<sup>23)</sup>

正式な戦争国家（連合国と日本）にだけ焦点を絞ることは、連合国側のために戦った植民地の実態（例えばインド人やフィリピン人）や日本のために戦った植民地の実態（朝鮮人、台湾人）を忘却することを意味するのと同様に、無形の戦争代理人と化しただけでなく、長い間、連合国と日本の双方で退役軍人恩給の対象であるということをも忘却させてきた。<sup>24)</sup> フィリピンでは、戦闘に参加しアメリカ軍人としてバターン死の行進で死んでいったフィリピン人が、米国の殉国者として認められるために戦った。五〇周年記念の際、フィリピン人兵であった、コルバン・K・アラバド（Corban K. Albadó）は『バターン死の行進、カパス——日本の残虐性とアメリカの不正の物語』に彼の思い出を書いている。彼は、いかにフィリピン人兵がバターン死の行進において、米国軍のサバイバーのために（ときには）従属を強いられたかを克明に記した。

しかし、戦争終結からわずか六か月後の一九四六年二月一八日に米国議会は、米国軍に対するフィリピン人兵の働きは、彼らが給付金や恩給を受給する権利を満たすものではないと明示する法規を採択した。それだけでなく、一九四一年にフィリピン人兵が米国軍に導入されて以降の、フィリピン人兵に対する未払い賃金も支払わないという法

規も採択した。米国移民法は、一九九〇年以降に退役軍人（ただしその家族は含まない）が米国に移り住むことを許可したにもかかわらず、二〇〇九年のバラク・オバマ大統領政権下で改正されるまで、彼らは同じ給付金や恩給を得る権利を得ることができなかった。そして、アラバドは存命中にその改訂を見届けることができなかった。<sup>25)</sup>

こうした限られた焦点によって、オーストラリアには三つの重要な局面において衝撃がもたらされた。第一に、植民地の戦闘員や非戦闘員の戦争体験をオーストラリア人の戦争記憶に導入することは、我々の隣人が抱く複雑で相反する体験と記憶に対する理解を要する。このことは、リム・プイ・フエン（Lim Pui Huen）とダイアナ・ウォン（Diana Wong）のエッセイ集『マレーシアとシンガポールでの戦争と記憶』に明確に描かれている。これらのエッセイは、時には日本の占領がポジティブな要素を有していることと記憶されていることを示している。マハティール元首相は、日本占領下の生活はかなり困難であったとの認識を示す一方で、長期的に見れば日本占領の影響は大変積極的なもので、マレーシア独立に貢献したと論じている。

第二に、マレーシアとシンガポールでの戦争記憶については、彼らが日本の侵略に抵抗したのとは対照的に、宗主国は植民地を守らなかつたという憤りが途絶えることはない。リム・プイ・フエンが、ジョホール（マレーシア）の

戦争記念碑に関して述べるように、英国当局は日本の侵略に備えてマレー人やマレーシアの中国人コミュニティを武装させたり訓練することをためらっていた。このためらいは、民族主義者がマレーシアの軍事能力を掌握することや、反植民地運動への武装化や軍事訓練の萌芽を阻止しようといった思惑によるものだ。<sup>26</sup>第三に、戦争と占領は東南アジアにおける民族集団に多方面で影響を及ぼしており、日本の占領に対しても多義にわたる評価が提示される。オーストラリアの政治家は、地域へ関与することの複雑さについて常に習熟しているわけではないのだ。

さらに、オーストラリア対日本、連合国対日本、という二元構造の外にある諸国の戦争をめぐる理解もまた重要である。なぜなら、戦後のオーストラリアでの白人優位政策の漸進的な修正により、人口構成が劇的に変化したからである。アングロサクソンを背景とするオーストラリア人は依然として支配的な役割を担っているものの、別の角度から見れば、二四〇〇万人を超える人口のうち約二〇〇万人は国外で生まれ同じ戦争を経験している。これらの人々は中国、インド、ベトナム、パプアニューギニア、シンガポール、香港、ミャンマー、カンボジア、インドネシア、タイ、日本、朝鮮で生まれている。近年来の移民流入に加え、オーストラリア生まれのかなり大きな割合を占める人々も、中国または中国系の人やインド人、ベトナム人、その

他の東南アジア人を祖先としている。オーストラリアの戦争記憶の一部として、これらの人々の経験と遺産を内包すれば、豊かでさらに包括的な歴史観を構成し得るだろう。

このような多文化国家の過去を凝集し描き出すには、アリフ・ディルリク (Arif Dirlik) が戦争における多様な一時性と呼んだ分離を克服することが必要となる。彼の指摘は、それぞれの人々にとり、戦争は異なる日に始まり、異なる日に終わったことである。オーストラリア人にとって日本との戦争は一九四一年に始まっているが、中国人にとつては、一九三七年におよぶ抗戦が始まっている。<sup>26</sup>そして、一九四五年八月一日、オーストラリアにとりVP (太平洋の勝利) やVJ (日本への勝利) として戦争は見かけ上は終わっているとしても (実際の戦闘はさらに続いた)、他の地域では独立闘争へと変容していった。一九七五年にオーストラリアに来たベトナム難民、彼らの家族と子孫にとつて——現在、我々の友人、同僚、隣人、学生である彼らの言語はオーストラリアで六番目に多く話されている——日本との戦争は、彼らが非ベトナム人オーストラリア社会にいることよりも、彼らを亡命へと導いた戦争とより密接に結びついている。

オーストラリア人である我々は、フランス領インドシナの日本占領に対する口述記録 (カナダ、フランス、米国による) を主な情報源としているが、私の認識ではこの情報

源には構造的な欠陥がある。ベトナム系オーストラリア人の戦争体験が顧みられず、多くのインド人捕虜の戦争体験も顧みられないなら、そのような人々は戦後のオーストラリアにおいていかに位置付けられようか。インド人捕虜の経験はインド独立自体にかかわる政治問題のため、ほぼ知られていない。独立前のインド国民軍（日本が一定程度支援していた）に参加した英国軍人であったインド人捕虜は、比較的良好待遇を受けていた。英国軍に忠誠を誓っていた捕虜の多くは、日本の捕虜収容所や労働キャンプで殺されている。戦争の終結とインドが独立へと向かっていく中で、彼らの大英帝国への忠誠心は「帝国主義勢力の手先」とみなされ、軽蔑されるものとなった。このような元捕虜たちは、元英国兵が恩給の対象とみなされていないように、独立したインドでは当然のことながら軽視されている。実際に、多くがインドに戻らずオーストラリアに渡ることを選択している。

論証していく上で、証拠の断片は容易に紛失してしまうが、また復元もされる。オーストラリア戦争記念館の書庫には、ジェマダール・チン・シン（Jemadar Chint Singh）が一九六四年初めに書き、オーストラリア第六軍の司令官に送られた手紙が保管されている。この手紙でシンは、オーストラリア第六軍が彼を解放したことに対して感謝の気持ちを表している。彼はこの時、日本人の手によりシン

ガポールからウエワクに労働者として送られた三千人余りのインド人の中で、生き残った六人のうちの一人が自分であることを明かしている。一九六四年、第六軍の司令官は、ジェマダール・チン・シンの手紙は興味深く感動的であるが、歴史的な重要性はほとんどないという意見を付して、この手紙を軍の歴史部門に提出している。手紙の内容は心を打つものであり、インド人捕虜の経験を歴史上の無関心から掘り起こすのにどれだけ長い時間を必要としたかを考えさせる。そして戦後、「歴史への関心の欠如」により日本人のアジアの兵士に対する残虐行為への歴史認識の多くの断片が、いかに破壊されたかを問いかける。ジェマダール・チン・シンの息子のナリンダー・パルマー・シン（Narinder Parmar Singh）は、ニューサウスウェールズの中等学校の校長なのだが、ジェマダール・チン・シンが一九八三年に亡くなって後に、ラジオとインターネット上で彼の父の物語を公表し得た。

ジェマダール・チン・シンとコルバン・K・アラバドの物語は、日本との戦争の歴史の中核をなす二つの体験事例であるが、収集されたオーストラリア人の戦争記憶の外側にはなお多くが残されている。一つは、オーストラリア人の戦争記憶はいかなる場合でも、たとえ白人のアングロサクソン同士であっても、同質ではないということだろう。例えば、東部州と違い西オーストラリアは、第二次大戦

を通じて東チモールと関係することになった。西オーストラリアでは、一九九九年の選挙とその後の混乱期の東チモールの独立支援は、「東チモールの人々に対して負っているものは何か」という言葉でしばしば表現された。それは、一九四二年を通じて行われた日本軍に抵抗するゲリラ戦を、誰がオーストラリアの特殊部隊として戦ったかということでもある。日本軍にとってチモールの確保することは、ジャワ進出の上で決定的なことであった。そして東チモール人とオーストラリア人による強力な抵抗を示すことは、連合国側のより大きな反撃の前触れとみなされた。このような反撃の可能性を防ぐことが、一九四二年二月にダーウィンが爆撃された理由である。未だに多くのオーストラリア人は、ダーウィンは侵略計画の一部として爆撃されたと信じているが、歴史家のピーター・スタンレーの業績<sup>20)</sup>により明らかにされた誤解である。

英語圏の学術界ではあまり論議されていないが、東チモールに対する日本の激しい報復は、ポルトガル人と日本人の記憶にはよみがえっている<sup>31)</sup>。東チモールに対する西オーストラリア人の記憶は、人々の思い出が支配的であるという意味において真に大衆的なものである。——長い投書とその内容は、一九四二年に東チモール人により命が救われた西オーストラリアの年配者の感謝の念を物語り、そのような年配者はオーストラリア政府が「戦争における東

チモールに対する恩義」を認識すべきだと考えている。しかし東部州では東チモール独立の支持者であっても、この戦時下における東チモールとの関係はほとんど語られない。東チモールの亡命希望者や最近の海洋紛争に対する東チモール人の利益に関わる運動家は、戦時下のこうした関係を一般に広めることに抵抗がある<sup>22)</sup>。なぜなら、このような「記憶の回復」過程は、一般大衆の記憶の論争だけでなく歴史を政治利用することにつながるからだ。

戦後の移民によってもたらされた戦争をめぐる男性戦闘員の勇敢さに関連し、収集された物語が増すことで、より複雑でより包括的なオーストラリア人の戦争記憶が作り出されるだろう。このような話は至るところで看取される。ナリンダー・パルマー・シン (Narinder Parmar Singh) は彼の父についてインターネットに書き込んでいる。シドニーでは、フィリピン人のルバンクから家族とともにやってきた若いドキュメンタリー作家のマイア・スチュワート (Mia Stewart) が、一九七五年初頭まで島に生存していた残存兵の小野田寛郎が、彼の家族に与えた激しい衝撃を映画にしている<sup>33)</sup>。しかし、戦争の衝撃に対するオーストラリア人の理解を高めようとするこうした試みもまた、さらに古い歴史をもっていることだろう。一九五二年に英国連邦占領軍のオーストラリア兵たちが、困難な時期にもかかわらず、彼らの日本人妻を本国へ連れ帰ることを許された

時、これらの「戦争花嫁」にも、かつての敵に対する疑念が向けられた。<sup>(34)</sup>

ニューサウスウェールズにある小さな町のカウラもまた、ほかの地域と異なった戦後を残している。その日本人捕虜収容所跡に所在する墓地と日本庭園は、四人のオーストラリア兵と二三人の日本人捕虜が死亡した一九四四年の脱走計画で有名である。あまり知られていないことだが、そこは民間の日本人の抑留場所であり、うち何人かはオーストラリア生まれであった。人数は比較的少なく一九四六年に日本へ「送還」されており、彼らは日系アメリカ人のように注目されることはなかった。

私がここで示したように、オーストラリア人の多くは戦争中日本に占領されていた国々に起源や血統をもつにもかかわらず、オーストラリア人の日本との戦争に対する記憶の一部は、第一次大戦に由来する勇猛果敢な国民的物語により、また一部は、第二次大戦の物語の中の日本の捕虜収容所での捕虜の特筆すべき体験により形作られてきた。何より主としては戦争記憶における「白人であるということ」と男らしさによって形作られている。しかし、偏狭で一元的な戦争の描写はオーストラリア特有のものではない。一般的に、戦争の遺産は長く残り痛みを伴い解決することは困難である。そして国家的、地域的な歴史の争いという形で、至るところで共同体を緊張と屈折へと導く。日

本自身の戦争記憶との折り合いをつけることの難しさは、度々オーストラリアでもニュースになっており、日本政府と国民は戦争の罪を十分に償っていないと考える人々を激怒させる。

しかし稀に、ある地域では「二次被害」の衝撃をめぐり議論が巻き起こることがある。このような議論は、過去二〇年ほどの戦争関連観光業の激増により、特に重要である。オーストラリアの観光業は、チャンギ、泰緬鉄道、そしてサンダカンやその他戦時中にオーストラリア人が被害を受けた場所において表出される多様な記憶に関連して発展してきた。このような場所では、年老いたオーストラリアの退役軍人は、日本の年老いた退役軍人の脇を通り過ぎることもある。またはオーストラリア人遺族が日本人遺族の脇を通り過ぎることもある。みな記憶を呼び覚ますことに忙しくし、ある人は彼らが互いをどう見つめるのか、彼らは今までに話そうとしたのだろうか、またその話ではどのように「現地住民」が扱われていたのだろうか、と、思いを巡らすことだろう。ある人は、これらの出会いにおいて、「現地住民」がすでに戦争によって生じた周辺者ではないことを望むだろう。またある人は、観光客は彼らが被った被害と死を追悼するのか、それとも彼らはただすれ違ってしまうのか、それとも、明らかに不必要な懸念だが、観光客との金銭のやり取りが地域の敵意や憤慨より

も重要なのではないかと、思いを巡らすだろう。

どのような共同体も、国家レベルでのみ自身と自身の過去に興味を抱いているのかが問われるだろう。しかし、過去とそれを思い出させ表現させることは、何かを包含し何かを排除してしまう。オーストラリア人の戦争記憶における白人であるということは、多文化主義を受け入れられるという、それなりに上手くいっているオーストラリア人の努力の多くに、硬直したコントラストを差し込む。第二次大戦に対する国民共同体としての我々の理解は、より広大な情景のための空間を作り出すべきである。変化し多様な民族起源をもつ共同体として、オーストラリア人の戦争記憶は、我々の異なる文化背景に、我々の多様な歴史に、歴史の基盤を与え、戦争とその余波が形作った我々の地域と我々の国民への理解を与えるべきである。

〔付記〕 本稿は、二〇〇六年にブルームで行われた学術会議の報告書に掲載された拙稿 (Stephen Alomes, Peter Eckersall, Ross Mouer and Alison Tokita (eds.), *Outside Asia: Japanese and Australian Identities and Encounters*, Monash University, Japanese Studies Centre, 2011) を加筆修正したものである。いくつかの文献を紹介していただいたヨウコ・ハラダ (Yoko Hadrada)、ピーター・スタンレー (Peter Stanley)、『ロビン・ガースター (Robin Gerster) の諸氏に対して謝意を表す。

## 注

- 〔1〕 Bartle for Australia Association, "Welcome to the Battle for Australia Website," <http://www.bartleforaustralia.org.au/index.php> (二〇一六年三月三日アクセス)
- 〔2〕 Peter Stanley, *Bad Characters: Sex, Crime, Mutiny, Murder and the Australian Imperial Force* (Sydney: Murdoch/Pier 9, 2010); Marilyn Lake, Henry Reynolds et al., *What's Wrong with Anzac: The Militarisation of Australian History* (Sydney: University of New South Wales Press, 2010).
- 〔3〕 Mervyn Bendle, "Gallipoli: Second Front in the History Wars," *Quadrant*, Vol. 53 No. 6 (June 2009), (<http://quadrant.org.au/magazine/2009/06/gallipoli-second-front-in-the-history-wars/>) (二〇一六年三月三〇日アクセス)
- 〔4〕 Ann Curthoys, "National Narratives, War Commemoration and Racial Exclusion in a Settler Society: The Australian Example," in *The Politics of War Memory and Commemoration*, eds. T. G. Ashplant et al., London: Routledge, 2000, 181-198.
- 〔5〕 Joy Damousi, *The Labour of Loss: Mourning, Memory and Maritime Bereavement in Australia*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- 〔6〕 このプロジェクトに関する情報は次のウェブページを参照。 <http://ourunobserved.anu.edu.au/> (二〇一六年三月三〇日アクセス)
- 〔7〕 Maryanne Dever, "Introduction," in *Australia and Asia:*

- Cultural Transactions*, ed. Maryanne Dever, London: Curzon, 1997, 3.
- 〈∞〉 Patsy Adam-Smith, *Australian Women at War*, Ringwood, Vic.: Penguin, 1996; Bruce Scates and Raelene Frances, *Women and the Great War*, Cambridge: Cambridge University Press, 1997; Alick Jacomos and Derek Powell, *Forgotten Heroes: Aborigines at War, from the Somme to Vietnam*, Melbourne: Victoria Press, 1993.
- 〈∞〉 Brendan Nicholson, “Push to honour New Guinea’s Fuzzy Wuzzy Angels,” <http://www.theage.com.au/national/push-to-honour-pngs-fuzzzywuzzy-war-angels-20080625-2wvu.html> (11 October 2008)
- 〈∞〉 Hank Nelson, “Gallipoli, Kokoda and the Making of National Identity,” *Journal of Australian Studies*, No. 53 (1997): 157–193.
- 〈∞〉 Nelson, “Gallipoli, Kokoda and the Making of National Identity,” 162.
- 〈∞〉 Hank Nelson, “Kokoda: Pushing the Popular Image,” *The Journal of Pacific History*, Vol. 45, No. 1 (June 2010): 89–104.
- 〈∞〉 Neville Meaney, “Australia’s Changing Perception of Asia,” *The Japan Foundation Papers No. 2*, Sydney: Japan Cultural Centre, March 1997: 10–12.
- 〈∞〉 Stephanie Bedo, “Strategic withdrawal Follows Anzac Day Japanese Flag Controversy,” *Gold Coast Bulletin*, <http://www.goldcoastbulletin.com.au/news/gold-coast/strategic-withdrawal-follows-anzac-day-japanese-flag-controversy/story-fnj94idh-1226900129037> (10 October 2012)
- 〈∞〉 Ross Eastgate, “Japanese Flag Parade Likely to Cause a Flap as it Flies above Anzac Day Parade,” <http://www.couriermail.com.au/news/queensland/japanese-flag-likely-to-cause-a-flap-as-it-flies-above-anzac-day-parade/news-story/e7c7b377339980a1be6431b5ad3d56c> (10 October 2012)
- 〈∞〉 真田國子 戦争犯罪裁判の経緯とこぼれ話、*アズケレウィッチ、Japanese War Criminals: The Politics of Justice after the Second World War*, New York: Columbia University Press, 2017 forthcoming.
- 〈∞〉 Michael McKernan, *This War Never Ends: The Pain of Separation and Return*, St-Lucia: The University of Queensland Press, 2001.
- 〈∞〉 Hank Nelson, *Prisoners of War: Australians Under Nippon*, Sydney: ABC Enterprises for ABC Corporation, 1985. 次の項は記述を参照。P. O. W.: *Australians under Nippon*, presented by Tim Bowden, Ultimo, N.S.W.: ABC Audio, 2007.
- 〈∞〉 Richard Flanagan, “Freeing My father,” *Sydney Morning Herald*, 21 September 2013, <http://www.smh.com.au/entertainment/books/freeing-my-father-20130916-2titz.html> (10 October 2013)
- 〈∞〉 Brian Farrell and Sandy Hunter (eds.), *A Great Betrayal?*

*The Fall of Singapore Revisited*, Singapore: Penguin, 2010.

〈83〉 Quoted in Hank Nelson (ed.), *P.O.W. Prisoners of War Australians under Nippon*, Sydney: ABC Books, 1985.

〈84〉 P. Ramasamy, “Indian War Memory in Malaysia,” in *War and Memory in Malaysia and Singapore*, ed. P. Lim Pui Huen and Diana Wong, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2000, 93.

〈85〉 Takashi Fujitani, Geoffrey M. White and Lisa Yoneyama (eds.), *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s)*, Durham: Duke University Press, 2001; Paul Kratoska (ed.), *Asian Labour in the Maritime Japanese Empire: Unknown Histories*, Armonk, N.Y.: M. E. Sharpe, 2005; Karl Hack and Kevin Blackburn (eds.), *Forgotten Captives in Japanese-Occupied Asia*, London: Routledge, 2008.

〈86〉 Chen, Yingzhen, “Imperial Army Betrayed,” in Fujitani, White and Yoneyama (eds.), *Perilous Memories*, 181–198; Utsuni Aiko, “Korean Imperial Soldiers: Remembering Colonialism and Crimes against Humanity,” in *Perilous Memories*, eds. Fujitani, White and Yoneyama, 199–217.

〈87〉 Corban K. Alabado, *Bataan Death March, Capas: a Tale of Japanese Cruelty and American Injustice*, San Francisco: Sulu Books, 1995; American Coalition for Filipino Veterans, <http://usfilivets.tripod.com/> (1101大排川田川1田ハハヤハ)

〈88〉 P. Lim Pui Huen, “War and Ambivalence: Monuments and Memorials in Johor,” in *War and Memory in Malaysia and*

*Singapore*, Cheah Boon Kheng, “the ‘Black-Out’ Syndrome and the Ghosts of World War II: the war as a ‘Divisive Issue’ in Malaysia,” in *Legacies of World War II in South and East Asia*, ed. David Koh Wee Hock, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2007, 47–59.

〈89〉 Arif Dirlik, “‘Trapped in History’ on the Way to Utopia: East Asia’s ‘Great War’ Fifty Years Later,” in *Perilous Memories*, eds. Fujitani, White and Yoneyama, 299–322.

〈90〉 G. J. Douds, “The Men who Never Were: Indian POWs in the Second World War,” *South Asia: Journal of South Asian Studies*, Vol. 27, No. 2, August 2004, 183–216; Peter Stanley, “‘Great in Adversity’: Indian Prisoners of War in New Guinea,” *Journal of the Australian War Memorial*, Vol. 37 (October 2002); John Baptist Crasta, *Eaten by the Japanese: The Memoir of an Unknown Prisoner of War*, Bangalore: Invisible Man Publishers, 1999.

〈91〉 Jemadar Chint Singh, “Farewell Letter”, [http://www.ww2australia.gov.au/lastbattles/g\\_letter.html](http://www.ww2australia.gov.au/lastbattles/g_letter.html) (1101大排川田川1田ハハヤハ); 大佐 森 隆。 Sean Brawley, Chris Dixon and Beatrice Trefalt, *Competing Voices from the Pacific War*, Denver: Greenwood Press, 2009.

〈92〉 Narinder Parmar Singh, “The Story of Major Chint Singh Indian POW World War II,” <http://hillpost.in/2007/07/the-story-of-major-chint-singh-indian-pow-world-war-2/2555/> (1101大排川田川1田ハハヤハ)



- 〈30〉 Peter Stanley, *Invading Australia: Japan and the Battle For Australia, 1942*, Camberwell: Viking, 2008.
- 〈31〉 Jose Duarte Santa, *Australianos e Japoneses em Timor n ail Guerra Mundial 1941-45*, Lisboa, Editorial noticias, 1997; Miyakawa Tadashi, *Fummu o komete zetsubô no umi tso watare*, Tokyo, Kôjisha, 1990.
- 〈32〉 Jeffrey Smith and David Webster, “East Timor’s Blood, Australian soil,” <http://www.etan.org/et2003/august/24-31/25eblood.htm> (二〇一六年三月三十一日アクセス)
- 〈33〉 Ma Stewart, “Search for Onoda,” <http://www.searchforonoda.com/> (二〇一六年三月三十一日アクセス)
- 〈34〉 Keiko Tamura, *Michi’s Memories: The Story of a Japanese War Bride*, Canberra: Pandanus Books, 2001.
- 〈35〉 Australian National Archives, “Cowra Breakout: Factsheet 198,” <http://www.naa.gov.au/collection/fact-sheets/fs198.aspx> (二〇一六年三月三十一日アクセス)